

《 地獄に行きかけた無神論者！ 》

…芸術の教授ハワード・ストームの体験 《 》

(アメリカ)

★ この表示付であればコピー・無料配布・インターネット上への転載が自由にできます。

Copyright c. エターナル・ライフ・ミニストリーズ <http://www.eternal-lm.com>

《天国と地獄の情報》 <http://www.tengokujigoku.info>

1985年六月、私はフランスにいました。私は芸術旅行で学生たちを引率しており、私の妻も私と一緒でした。そして旅行の最後の日が来ていました。

話をしていた途中で、私は地面に倒れ、**腹部の激痛**で悲鳴を上げました。救急車が来て、私はすぐに病院に運ばれました。私は医師から、十二指腸に穴があると告げられ、手術が必要でした。

その日は土曜日でした。私は入院し、ベッドに寝かせられました。看護師が病室に入って来て、私と私の妻に、「**これから手術です**」と言いました。

私は**瀕死の状態**でした。いわば、私は指の爪だけ引っかけて、なんとか生き延びようと努力しているようなものでしたが、もはやそれまででした。

私にとっての問題点は、**私が無神論者だった**ことです。私は十代のころ、リベラルな信仰のプロテスタント教会で育ち、信仰を失っていました。そして大学生の時には科学的無神論者になっていました。

今や、私は死に直面して、**絶望と憂うつ**以外の何も感じていませんでした。

私は自分がまもなく死のうとしていいると感じ、**自分は存在しなくなるのだ**と自覚しました。

私の妻は無神論者ではなく、信仰がいくらかありました。私が妻に話すと、妻は涙を浮かべました。

私は目を閉じ、**無意識状態**になりました。

● 自分の肉体の隣にいた自分

どのくらい時間がたったのか知りません。**気がつく**と、私は自分の体の隣に立っていました。目を開けると、私のベッドに一つの**体**があったのです。

自分の体の外部にいるのがどうやって可能なのか、私には理解できませんでしたが、私はその体を見つめていました。それだけでなく、私はこのうえなく心がかき乱されて混乱していました。

なぜなら、私は妻の注意を引こうと**金切り声**を上げているのに、**彼女は私を見ても聞いてもなく、少しも動かなかった**からです。私は同じ病室の同僚のほうを振り向きましたが、反応は同じでした。

彼も私のことなど忘れていました。私はますます怒りがつのり、心がかき乱されました。

私の名前を呼ぶ声が聞こえたのは、その時でした。声は部屋の外からでした。

初めは、私は恐れていましたが、その声は親しみのある声のようでした。そして私が部屋の入口に行くと、**もやの中で数々の人影**が動き回っているのが見えました。私は彼らに近くに来ようと言いましたが、彼らは、私がはっきり彼らを見ることのできるほど近くには来ようとしませんでした。

私が見ることができたのは、彼らのシルエット（影絵）とおおまかな特徴だけでした。それらの**存在者**たちは、私に、**彼らのところに来い**と言いつけました。

しかし、私が多くのことを尋ねても、彼らは、それをすべてはぐらかして、あいまいな答えを言

うだけで、彼らのところに来るようにと主張しました。

こうして私はいよいよながらも同意したのです。

「私たちはどこに行くのか？」というような質問を私が続けても、彼らは私に、「着いたら、わかる」と言いました。それから私が、彼らがだれなのかと尋ねると、彼らは**私を連れに来た**と言いました。

こうして私は彼らの後について行きました。

私たちが進み続けた行程は何マイルもあったことを、私は知っています。そこには何の風景も建造物もありませんでした。あるのはただ、ますます濃くなって、**ますます暗くなっていく**もやだけでした。

彼らは私たちがどこに行くのかを私に言いませんでしたが、彼らが私の面倒を見てくれること、そして、私のために用意しているものがあるということ、ほのめかしました。

● 拷問と笑いと悲鳴

ますます**暗くなる**につれ、徐々に彼らは**残酷さ**を増していきました。その**生き物たち**は私をからかい始めました。ある者は、別の者たちに、「おい、気を付けろ、彼をおびえさせて逃がすなよ」とか、「静かにしろ、もうすぐだ」と言ったりしました。さらに、彼らは私のことで**卑猥なジョーク**も言い始めました。

初めのうちは、それらの生き物は一ダースくらいいるようでしたが、その後は、四十匹か五十匹くらいいると思うようになりました。さらにその後では、**何百匹か、それ以上**いるようでした。

その時点で、私はもうこれ以上行くつもりはないと言いました。これは私の側の、はったりのようなものでした。なぜなら、私はどの方向が後ろで、自分がどこにいるのかも、わからなかったからです。

私は病院の中にいるはずなのに、どうやってこんなに遠くまで歩いてきたのかわかりませんでした。

その生き物どもは私を押ししたり突いたりして反応しました。最初は、私はうまくやり返して、彼らの顔を打って彼らを蹴ることができました。けれども、私は彼らに少しも苦痛をもたらすことができませんでした。彼らはあざ笑っているばかりでした。

それから彼らは指の爪や歯で私を**ひっかき**始めました。私は**本物の体の痛み**を経験しました。これは長い間続き、私は戦って、彼らをかかわそうとしました。それが困難だったのは、私が大ぜいの者たちの真ん中において、私の周囲に彼らの**手や歯**があったからです。

私が**悲鳴**を上げて、もがけばもがくほど、彼らはそれをますます気に入っていました。その**騒がしさ**は、ものすごいものでした。**残酷な笑い**と**絶え間ない拷問**があったからです。それから彼らは、別のさまざまな仕方でさらに私を**侮辱**したり、**暴力**を振るったりしました。それは、あまりにも恐ろしくて話すことができません。その会話も、想像できないくらいにひどいものでした。

ついに私にはもうこれ以上戦う力も能力もなくなり、地面に倒れました。彼らは私への興味をなくしたようでした。人々がそばを歩いて私を蹴ったようでしたが、激しい怒りはなくなっていました。

● 神に祈りなさい

私がそこに横たわっていた時、このうえなく不思議な体験をしました。私の胸部から生じているような**一つの声**が、私の知性に話しかけたのです。

それは内面的な会話であり、その声は、「**神に祈りなさい**」と言いました。

私は私の声と言い争って、「私は神を信じていないのに、どうやって神に祈ることができるのだろう？」と言いました。しかし、私の声はこう言いました。

「神に祈りなさい」

私はこう思いました。「しかし、私はどうやって祈ればよいのか知りません、祈りがどのようなものか知りません！」

三度目に私の声と言いました。「神に祈りなさい！」

それで私は、試してみるほうがよいと思いました。私は次のようなことを考え始めました。

「主は私の羊飼いです。神よ、アメリカを祝福してください」

聖なることのように聞こえることで、私が思い起こすことのできる小さなことばかりでした。まもなく、それらの思いは、つぶやきとなりました。すると、私の周囲の生き物どもは、「神は存在しない」と言って私に向かって**悲鳴や金切り声**を上げ始めました。

彼らは私に、「おまえは世界で最悪の者だ」、「おまえの言うことを聞ける者は一人もいない」と言いました。これらの生き物どもがとても強く抗議したので、私はもっと多くのことを言いました。そして彼らに向かって、このように叫びました。

「神は私を愛しておられる。私から離れ去れ。神の御名によって、私から離れろ！」

彼らは私に向かって叫び続けていましたが、今や彼らは**暗闇**の中へと退いていきました。

気がつくやうに、私は自分が思いつくことで、宗教的に聞こえるどんなことも叫んでいました。しかし、周囲にはだれもいませんでした。私は**暗闇の中で完全に一人きり**でした。まるで私のことばが彼らに熱湯を浴びせたかのように、彼らは退却していました。

私は詩篇二十三篇の一部を叫んで、「**私は死の陰の谷を歩いても、わざわざを恐れませんが**」と言ったり、**主の祈り**をしたりしましたが、それらを信じてはいませんでした。

それらが生き物どもを**追い散らす効果**があるとわかったので、そうしたのですが、私の心の中では、その真実性については確信していませんでした。

私はそこに一人でいました。どのくらいの間であったか、私は知りません。私は**絶望**の中へと沈んでいきました。あり得ないと思うくらいに深くへ沈んでいきました。

私がたどり着いたのは、**暗闇の中**であり、暗闇のどこかに、悪しき生き物どもがいました。私は動けず、這うこともできませんでした。私は全くずたずたに引き裂かれた思いで、どうすればよいかわかりませんでした。事実、私は自分が本当にもう存在したくないと思うまでになっていたのです。

このうえなく深い絶望のその瞬間、私の**子どものころの歌声**が頭に浮かんで来ました。私が**日曜学校**に出かけて行った時のものでした。

「イエス様は私を愛しておられます…イエス様は私を愛しておられます、私はそれを知っています」

私はそれまで人生で願い求めてきたどんなものよりも、そのことが真実であってほしいと思いました。私の知性も力も心も、私の存在のすべてをもって、私は暗闇の中に向かって叫びました。

「どうかイエス様、私を救ってください！」

私は本気でした。私はそれを疑うことはなく、私の全存在をもって本気でそう言いました。

そう言ったとたん、小さくてぼんやりした星が暗闇の中に現れました。それは急速にどんどん明るくなっていき、やがて大きくなって、描写できないくらいに**明るい光**となりました。

それは私をその光自体の中に拾い上げたのです。それが私を持ち上げる時、私が自分を見下ろすと、私が受けた裂け傷や涙やさまざまな傷が、すべてゆっくりと消えていきました。私は持ち上げられていく時、全く健康になりました。それは説明しがたいほど美しいもので、それは善なるものであると私にわかった、としか説明できません。

● **本気で泣いた最初の時**

ほんの少し前までは私は**無神論者**であったのに、すぐ後では私のすべてが**イエス様**を欲していました。私は、私のプライドも、私の**利己主義**も、私の**自己信頼**も、大いに高められた私の**知性への依存**も、すべて失っていました。**そういうどんなものも、もはや私に役に立たなくなっていたのです**。それは私を裏切っていたのです。私が自分の人生の目的としてきたどんなものも、私の神としてきたものも、私が崇拝してきたものも、どんなものも私を見捨てていました。

私が呼び求めるに至ったものは、何年も前の小さな子どもの頃に植え付けられた一つの望みでした。

私は、その光はだれよりも私のことを良く知っているとうわかりました。つまり、その光は、私がそれまで一度も経験したことのない仕方でも私を愛してくれたのです。

私は泣き出しました。それは、私の人生で起こったどんなものをも、私から完全に一掃してくれたのです。私はその時まで泣いたことがあったのは、たぶん二回か三回だったと思います。私は、泣くのは弱さを示すことだと考えていました。この時は、**私が大人になって本気で泣いた最初の時**でした。

現在、私は泣くのはとても重要なことだと考えています。泣くことが適切なことなら、私は自分

自身に泣く許可を与えます。私は抑えることはしません。

この光（私は現在、それを光の天使と呼んでいます）は、行き来しているほかの数々の光や天使たちに囲まれていました。天使とは、神からの使者を意味します。この天使も確かにそうでした。彼が私をつかむと、私たちは暗闇のその場所から出て**上がって**行きました。そして空間を旅行し始めました。

遠く離れた所に、**星で満ちた空**だと私には思われるものが見えました。ところが、私たちがそのほうへと移動すると、彼らはみな動いていることに私は気付きました。中心部から離れて行ったり、中心部へ向かって動いたりしていました。

これらの天使たちは忍耐強くて善良な教師たちであり、「私は愛されて受け入れられている」ことを私に感じさせてくれました。しかし、彼らが私に教えるのがとても困難なこともありました。

● 人生で重要なこととは？

彼らが最初にしようとしていたことの一つは、**私の人生を私に「明らかにする」**ことでした。私は、とても恥ずかしいのでそれを願わない、と彼らに話しました。私は冒瀆したり、真理を否定したりして人生をおくってきましたが、ここでそれを**直視**させられていたのです。

私は自分があざ笑ってきた人々や、おそらく私が教師として真理を否定して神から離れさせてしまった人々など、そのすべての人々の重みを感じました。私の冷笑や自己崇拝によってもたらした損傷について、私は考えるのも耐えられませんでした。

私たちはいっしょに**私の人生**を見つめました。それは初めから終わりまで、時間の順序で私たちの前に映し出されました。非常に速く過ぎる箇所もあれば、非常にゆっくりの箇所もあり、異なる観点から幾度も見た箇所もありました。はっきりした背景はなく、私の人生の**さまざまな姿**がありました。

重要なのは、その人々であって、環境ではありませんでした。私たちは時間において戻ることも前に進むこともでき、またさまざまな場所を見ることができました。ただし、それらの場所に実際に存在することはできませんでした。

私が達成しようと熱心に働いて**人々から賞賛された場面**などになった時、彼らはそういうことには**全く関心を持ってなく**、すぐにやり過ぎました。私は、自分がどれほど熱心に働いて賞を獲得し、衆目を集めることになったかを彼らにわかってもらいたかったので、その場面で止めるようにと彼らに言いましたが、彼らはこう言いました。

「確かにそうですが、**それは重要なことではありません**」

悪い出来事の場面になった時や、良いことより悪いことのほうが多い場面では、天使たちはそれを詳しく見せました。たとえば、私が人生で失敗したことの一つは、人々と関わり合う仕方でした。

私は人々を、利用する物、彼らから何かを得るための物と見ていたのです。つまり、私は自分のさまざまな関係を操作していたのです。

私は、自分が父を怒らせてしまった次第を見ました。というのも、父はビジネスにばかり注意を向けていたからです。私は意図的にそれをしたのではなく、それは十代の時期の嫉妬心によることでした。私は、父が仕事にばかり注意を向け、私には注意を払わないことに嫉妬したのです。

別の状況で、美しい若い女性が私の生活に登場しました。彼女は、彼女自身と彼女の愛を私に与えました。しかし私は彼女を心理的に虐待したのです。

私が見たもう一つのことは、神が私に贈り物として、**子どもたち**と、彼らを育てる**妻**とを与えてくれたことでした。ところが、私は彼らを私自身のエゴの延長として見たのです。

もし彼らが、私がしてほしいことを行えば、もし彼らが私のような者であれば、私は彼らを喜びました。彼らが私と同じようではない振る舞い方をすれば、私は彼らを憎み、怒りをあらわにしました。

また私は、自分がどんどん人々から遠ざかっていき、自分のわがままな世界の中で生活し、ますます不幸になっていくのに、この世とはうまくやっている自分を見ました。私は成功しており、仕事では昇進し、お金をかせいでおり、私はすばらしい人だとみんなから思われていたのです。

天使たちは、私を愛していることを私にわからせるために止まらなければならないことが、何度もありました。私は自分がおくってきた人生で彼らをどんなに傷付けているかも、私には可能性があったのに彼らの期待や希望をどんなに裏切ってしまったかも、わかりました。

● 神が願っておられる生き方

私は幼い子どものころのことも見ました。私は、愛のある人、与える人、信頼する人になるよう強制されてきました。しかし私はそのことからそむいていました。それは、だれのせいでもなく、私自身のせいでした。彼らは私に、私がどのようにして**主**にそむいてきたかを見せました。それはすべて**プライド**でした。

私は十代のころ、良い信仰的な教えを受けませんでした。私が受けたのは信仰ではなく、多くの、このうえなくリベラルで人間的な**合理主義**でした。

私は、私自身が人々に、「あなたはイエス様を信じていますか？」とか、「天国と地獄を信じていますか？」と尋ねているのを見ました。

すると彼らは、「いいえ、本気じゃありません。」と言いました。その人たちは私の教会内の人々でした。答えを探している私自身が見えました。

そして、私は大学に入ると、答えを全部知っているように見える人々を見出しました。マルクス主義者や無神論者たちでした。彼らは、社会主義や彼らの理想を通して世界を変革していこうとしていることについて、ぴったりの答えを持っているように見えました。私はそれに巻き込まれたのです。

私の人生で幾度か、**神が非常に多くの方法で私に手を差し伸べようとしたようす**を見ることができました。ラジオから聞こえる**歌**であったり、私が読んだ**物語や小説**であったり、歴史の本の中の**伝記的描写**であったりしたこともありました。

神は、私を愛している**善良な人々**を通して私に手を差し伸べようとして、私の心を開いて私に近づこうとされたのです。私の人生のどの日にも、神は私のために手を差し出しておられたようでした。

この体験の前、もし人々が私に、「神は良い神ですか？」と尋ねたとしたら、私は彼らをあざ笑ったことでしょう。しかし、今、私が気付いているのは、神は私たちが良いお方だと思っているより、**ずっとすばらしいお方**であられるということです。「良い」ということばは、その御性質のほんの小さな反映にすぎません。

私の前にもたらされた**私の全生涯**を見た後で、天使たちは私に何か質問はないかと尋ねました。私にはありました、たくさんありました！

私は彼らに、良い質問も、ばかげた質問も、知的な質問も、哲学的な質問もしましたが、私が何を尋ねても、彼らははっきりわかりやすく答えました。

私は天使たちに、「**私は天国に行きたい**」と言いました。しかし彼らは、私は**まだ用意ができていない**と言いました。彼らは、「**あなたは行って、神があなたに生きてほしいと願っておられる仕方**で生きなければなりません」と言いました。

私はできる限りに強く議論しました。彼らは非常に穏やかでしたが、**その時点で私が天国を選択できない**という点については意志が強固でした。

気がつくのと、私は自分の**体の中**に戻っていました。私は、どういうことが起こったかを私の妻に話したいと思いました。しかしあれほどの**平安と喜び**から戻って来たのに、私の体は**痛み**でとても苦しんでいて、妻に話しかけることができませんでした。

その時、看護師が入って来て、医師がこれから私にすぐに手術を行いますと言いました。彼らは私の妻を病室の外に連れ出し、私は手術室に運ばれました。それまで妻は、私を失ってしまったという思いに包まれていました。私はおそらく三十五分間くらい意識がなかったからです。そのため、彼女はこれからどうなるのか全くわからずにいたのです。

翌日、妻が回復室に来た時、私の体のどの箇所にも管が付けられていたはずですが、私は彼女に、**神の愛**について、また彼女が**イエス様に自分を献げなければならない**ことについて話そうと努めました。私は彼女に、イエス様に対して「はい」と言うようにと言いました。彼女は、私が完全に頭がおかしくなったと思いました！

私が次に彼女を見た時、もう一度彼女に、もっと穏やかに話そうとしましたが、私はとても感情的に興奮してしまいました。看護師たちが病室に入って来た時、私は彼女たちに、「あなたたちは神の働きをしています。人々を助けて愛しているからです。神はあなたたちの仕事に微笑んでおられます」と言いました。言うまでもなく、私は狂人だという評判が立ちました。

それから私は両手で**聖書**を取り、**みことば**を読むようになりました。そして、人々が面会に来た時、私はそのみことばを彼らに暗唱しました。なぜなら、もしかすると私が言うことばはあまり良

くないのかもしれないと思ったからです。しかし、もちろん、人々はそれも好まなかったのです。その間、神は私に語りかけてくださり、その病院を離れてアメリカに帰るようと言われました。

医師たちは、私が生きているのは**奇跡**だと言いました。私は、「そのことばを本気で言っているんですか？」と言いました。彼らが本気ですと言うと、私は神のことや、神が彼らを愛しておられることを彼らに話し始めました。すると彼らは急いで部屋から出て行きました！

私が何ヶ月もかけて学ばなければならなかったのは、私がとても熱心な仕方でも世界を回心させようとしてもあまり成功しないということでした。

特に、私の妻には、私は落ち着いてしなければなりませんでした。私は感受性が乏しかったにもかかわらず、彼女は**イエス様を彼女の救い主として信じる**に至ったのです。

人々は、「それは全部、あなたが見た夢ではないか？」と何度も言いました。私も自分は夢を見たのだと思ってしまいそうになったことも時々ありました。

私の体の具合がとても悪かった時、私は午前三時ごろに目が覚め、絶望感を覚え、死んですべてから抜け出したいと思いました。その時、神の愛と平安が私に訪れ、私は自分の否定的な反応をととても恥ずかしく感じ、私があの体験をしたのは、私があの愛を信じて信頼するためであったのだとわかりました。私がそうした時、**健康**になってきたのです。

この体験で**私の人生は完全に変わりました**。その結果として私がフルタイムの奉仕者（牧師）になっただけでなく、それによって私の感じ方も変わりました。

それまではいつも**憂うつと冷笑**がありましたが、現在は**本物の喜び**がいつでもあります。私にはアップダウンがないと言っているのではありません。一日一日に**喜び**で満ちたものがあり、私はその喜びと平安を広めようとベストを尽くして努力しているのです。しばらくたってから、私は、ある聖書研究のグループで話すよう招かれました。人々は私に、私の話で彼らの信仰が強められたと言いました。

私は彼らに愛され、彼らに受け入れてもらえたという気持ちになり、そのことで励ましを受けました。そこでの出来事から、他にも数々の機会が与えられるようになりました。私が重要なものではありません。私の話が重要なものでもありません。重要なのは、私がだれかの信仰を**励ます**ことができることです。あるいは、信仰を持っていない人のために、その人がどういう者であり、何であるかということを私が再検討させてあげることができることです。

私の望みは、私が人々を**キリスト**に導く道具となることです。なぜ神が私をお選びになり、この体験をさせてくださったのか、私は本当にわかりません。

しかし、物事をはっきり表現する能力のある教師として、また、確かな**無神論者**として良く知られていた者として、私は、神はご自分の力を人々に示そうとしておられると考えています。

私はこれまでたくさんの本を調べ、臨死体験をした人々にもインタビューしてきました。そしてわかったのは、あざけられると思って自分の体験を話すことをためらっている人が大ぜいいることです。

また、あの深い果てのところに行って体験したことについて、大きくまちがった解釈をしている人々もいます。たとえば、ある女性がテレビで自分の体験を話し、こう言いました。「光と愛ばかりでした。地獄はありませんし、裁きもありません。完全な愛と光だけです」私は彼女のことを気の毒に思います。なぜなら、彼女はもしかしたら一瞬、聖なる体験をしたかもしれませんが、その後で、非常にまちがった神学的推測をそれから造り出してしまったからです。

私たちがこの世界で**何をしているか**が、自分がこの世界から出て**どこに行くか**を決定するので、人々は**自分の行動の結末**を直視しないように努めています。彼らは自分を欺いて、こう言っているのです。

「私は自分がしたいことを何でもできる、そんなことは問題ではない」と。それは**問題**なのです。私たちがこの世界で行うどんなことも、重要なのです。

私たちは自分のまちがった行いを**赦してもら**うことが可能なのです。ただし、私たちは**回心**しなければなりません。それは、**自分の罪や悪**を放棄し、そして最も重要なこととして、**イエス・キリストを自分の救い主として受け入れなければならない**ということなのです。

（「天国と地獄の現実！…臨死体験者たちの証言」より抜粋）

★天国に行った人々・地獄に行った人々__死の床での証言集！ 順にどれもお読みください。

★ この表示付であればコピー・無料配布・インターネット上への転載が自由にできます。

Copyright c. エターナル・ライフ・ミニストリーズ <http://www.eternal-lm.com>

《天国と地獄の情報》 <http://www.tengokujigoku.info>

1 《不信心息子の恐るべき死》

(『天国に行った人々・地獄に行った人々』より抜粋)

■息子と両親の会話

【息子】「母さん、俺はあの本（聖書）の中にあるような、くだらないことに、俺の将来の希望を置くようなことは決してしないからね。

十歳の子どものほうが、もっと、まともな話をすることができて、もっと、ましな本を作れただろうね。

俺は、聖書は今まで人間に押しつけられたうその中で、最悪のものだと信じているよ。

あの詐欺師のイエス・キリストに頭を下げて、彼の救いの功德により頼むくらいなら、俺は地獄に行くほうがましだよ、もしそんな所があるのならね」

【父】「気を付けろよ！ 気を付けろよ！

神は侮られる方ではないからだ。

神は悪者を長く忍耐してくださるが、怒りを永遠に保っておられるわけではない。

どんな罪も赦されるが、聖霊に対する罪は別だ、それには赦しはない。

聖霊に対して罪を犯していた最中に神に打たれた人々の例は、歴史上もたくさんある」

【息子】「もっともだね、父さん、俺はあの本をののしったことで、命を奪われることでも、そのためにどんなに苦しむことでも、受けてやるよ。それを来させてみなよ、俺は少しも怖くないね」

【親】「父なる神様、この罪を彼に負わせないでください、

彼は自分が何をしているのか、わかっていません」

【息子】「いや、俺は自分が今何をしているかも、何を言っているかも、よくわかっているよ。本気さ」

【母】「ジョン、おまえは本気で母さんの気を狂わせるつもりなのかい？

ああ、神様！ 私がこの歳になって、こんな恐ろしい試練に見舞われるとは、いったい私は何をしたというのでしょうか？」

【息子】「母さん、俺が自分の気持ちを話すのを聞きたくないのなら、どうしていつもそういう話題を持ち出すんだい？

それを聞きたくないのなら、二度とそういう話題を持ち出すなよ。

俺は二度とあの本のことは話さないからね」

■何か恐ろしいことが...

この会話は、愛情深い両親と一人息子との間で交わされました。

この息子は大学から一時的に家に帰っており、今から大学に戻ろうとしているところでした。

この爆発の原因は、この心優しいクリスチャンの両親が彼に優しい勧めのことばを少しかけようとしたことでした。

ところが、なんと、それは最後の勧告のことばとなりました。

そして、彼は両親にそう言って、家を出て行きました。

この愛情深い両親は、何か恐ろしいことが起こると自分たちに告げられたかのように、彼のことを気にかけていました。

おそらく、この息子は、

「あなたの父と母を敬いなさい」 (新約聖書 エペソ書 6・2)

「けん責されて、うなじを固くする者は、突然、砕かれる。そして、癒しはない」

(旧約聖書 箴言 29・1)

と言われた方(神)が、自分が言ったあのことばの釈明をさせるべく、そんなにすぐに自分をお呼びになるとは、思ってもいなかったはずです。

あのことばは、彼の年老いた両親の心をどんなに引き裂いたことでしょうか。

また、それは聖なる神の目に、どんなに恐ろしいことばであったことでしょうか。

彼はその恐ろしい考えを、大学の、一人の不信心なクラスメートから受けていました。

若い人々よ、自分がだれと交流するか、気を付けなさい。

この若者が墮落してしまったように、あなたも同じようにならないためにです。

■片腕と頭蓋骨の骨折・両足の切断！

ジョン・Bは家を出て、急いで駅に行きました。そこで彼はM行きの列車に乗りました。

そのMで、あと二、三ヶ月すれば彼は学業を修了するはずでした。

列車が数マイル進んだ所で、カーブにさしかかりました。

突然、線路上の何らかの障害物に出くわしました。

そのため、機関車および車両二台が脱線しました。

その瞬間、ジョン・Bは、車両から車両へと移ろうとしていたところでした。

彼は一瞬にしてデッキから投げ出され、落下して、彼の左腕は骨折し、頭蓋骨も砕かれました。

そして一瞬の内に、車輪の一つが彼の胴体近くの両足の上をまともに通過し、このうえなく恐ろしい仕方です。両足を砕き、ずたずたに切断しました。

不思議に思われるかもしれませんが、負傷者は他に一人もいませんでした。

■変わり果てた姿での帰宅

すぐに、この恐ろしいニュースが、悲しみに打ちひしがれていた両親のもとに届きました。

やがて、その息子が両親のもとに運ばれてきました。

彼は、家を出て行った時とはちがって、担架の上で横たわり、かわいそうなことに、ずたずたの状態、わめき散らしていました。

このニュースがその大学に届くと、彼のクラスメートたちが彼と面会するために急いでやって来ました。

ああ、なんと心を引き裂かれる光景だったことでしょうか！

彼が最初に発したことばは、人が地上で決して聞くことのないような叫びでした。

「母さん！ 俺は滅びてしまったんだ！ 滅びたんだ！ 滅びたんだ！

呪われたんだ！ 呪われたんだ！ 永遠に呪われたんだ！」

そして彼のクラスメートたちがベッドの近くに来ました。

彼らの中に、彼の知性を不信心で害した、あの者がいました。

ジョンは恐ろしい力でベッドから体を起こし、その者をにらみつけ、こう叫びました。

「J、おまえが俺をこうしたんだ。

おまえが俺のたましいを滅ぼしたんだ！

全能の神と子羊なる神の呪いが、おまえのたましいの上に永遠にとどまるように」

それから彼は、まるで地獄の悪魔のように、**歯を食いしばり**、その者をつかんで彼を粉々に引き裂こうとしました。

それに続いて、どんなに強い人でもおびえて逃げ去ってしまうような光景が展開しました。

ただし、かわいそうなことに、その両親は、そのすべての事態を見聞きしていなければなりませんでした。というのも、彼は彼らを一瞬たりとも去らせなかったからです。

■彼を地獄へと迎えに来た悪霊ども

彼は憔悴しきってベッドの上で**後ろに倒れ**、こう叫びました。

「ああ、母さん、俺を救ってくれ、
悪魔どもが俺を追いかけてきたんだ。
ああ、母さん、俺を腕に抱きしめて、**あいつらが俺を捕まえないようにしてくれ**」

そして彼の母が彼に近寄ると、彼は自分を大切に育ててくれた母の胸に顔をうずめました。しかし、彼は母から離れ、この地上のものではないような声で**金切り声**を上げました。

「父さん！ 母さん！ 父さん、俺を救ってくれ、
あいつらが来て、俺のたましいを引きずって行くんだ、...俺のたましいを地獄に」

彼の**両目**は飛び出しそうになり、ベッドの上で**後ろに倒れて死にました**。

彼の霊は、**恐ろしい滅び**へと、悪霊どもによって引きずられて行きました。

彼の恐るべき崩落が、知らず知らずのうちに同じ道をたどろうとしている人々への**警告**となりますように。

(『天国に行った人々・地獄に行った人々』より抜粋)

2 《 地獄に引かれて行った中国人の少年 》

ハロルド・A・ベイカー（アメリカ人宣教師）

■更正すると約束していた少年

... アデュラムの一人の少年が**地獄**に引きずられて行きました。

彼は、軍隊のある士官から、『使い走り』の役目を**解雇**された少年でした。

私たちは彼が街で幾日も物乞いをしているのを見て、**アデュラム救済ホーム**に彼を連れて来ました。

彼は**更正**することを約束し、**うわべ**はきちんとしているように見せました。

また、かなりの間、**福音**を聞いており、**悔い改めた**と公言していました。

ホームからさまざまな**物が無くなりました**が、その**どろぼう**が見つかったのは、この少年が**盗品を売り**に行くと途中で捕まった時でした。

それから私たちは彼をホームから出しました。

この少年は、それから数ヶ月間、物乞いの生活をしていました。

この間、彼は、私たちが彼に戻ることを許すなら自分は**更正する**と繰り返し約束しました。

それから私たちは彼にも**もう一度チャンス**を与えました。主も彼にもう一度チャンスをお与えになりました。というのも、生活を正すに十分なまでに、**聖霊の現れ**や**超自然的な啓示**もあったからです。

この少年自身も**聖霊の油注ぎ**を受け、主は彼の**罪**をじかに取り扱われ、彼にも**もっと良い道**を示されました。

■ふたたび罪の生活へ...

そういうすべてのことにもかかわらず、この少年は逃げ去って、物乞いと**どろぼう**をする街の**ギャング**に加わりました。

二、三ヶ月後、彼はころんで**片腕を骨折**し、**感染症**を患うようになりました。そして彼が死にかけていた時、ある病院の職員に拾われました。

ところが、その病院で、彼はあまりにも**不従順**であったため、放り出されました。

そして、彼は路上で死にかけていました。

彼は**悔い改める**との約束をもって私たちのところに来たので、私たちは彼をあわれみ、**もう一度**彼を収容しました。

彼は日一日と、**人生の終わり**に近づいていました。

■彼を地獄へと迎えに来た悪霊ども

彼が死ぬ前の日の晩、私は、**この地上のものではないような悲鳴**で目が覚めました。

それは、何らかの**野生動物**か、何らかの**恐ろしいもの**の、**薄気味悪い遠吠え（わめき声）**のように響きました。

その翌日、その少年が死んだ時、私は外出中でした。

彼が死の苦しみの中で横たわっていた時、うれしそうに、**恐ろしい悪霊ども**が彼の周りに集まりました。

彼の**たましい**が彼の**体**から離れようとしていた時、その少年は、自分を捕らえる者どもを見て、**泣き、わめき、悲鳴を上げ**、このうえなく**おびえて**、声の限りに叫びました。

「**ベイカーさん、助けて！ 助けて！ 助けて！**

ああ、ベイカーさん、すぐに来て！

ベイカーさん、ベイカーさん、ベイカーさん！

助けて、あいつらがみんな鎖を持って、俺の周りにいるんだ！

あいつらが俺を連れに来たんだ。

助けて、助けて、ベイカーさん、助けて！

あー、あー、あー、助けて！ 助けて！ 助けて！

あいつらが俺を鎖で縛ってる。助けて！ 助けて！

あー、あー、あー、助けて！ あー、じ...ご...」

3 《 イエス・キリストを拒んで

暗いトンネルを通過して地獄へ行った男 》

メリー・アクセルソン (スウェーデン)

在日約55年の女性宣教師の証言

私が二十歳位の時でした。国 (スウェーデン) のある老人ホームで働いていた時のことです。

ある日、Kという名前の老人の体の具合が急変し、亡くなろうとした時のことです。

私は彼のベッドのそばに立っていました。

Kが亡くなる直前、彼は大声で、「助けてくれ！ 助けてくれ！ 見ろ！」と叫びながら、足元をさし、**恐怖に震える声**で言いました。

**「たくさんの悪霊が来て、私を地獄へ連れて行ってしまおうんだ！
助けてくれ！」**

彼は、そう叫びながら亡くなっていきました。

その時、私が恐れながらKの足元を見ると、そこに**真っ黒なトンネル**がありました。

そして、その中から**真っ黒な服を着て真っ黒な帽子をかぶった悪霊**が出て来ました。

老人の遺体からも、何か灰色の柔らかそうな「もの」(それは老人の体の形に見えました)が出て来ました。

そして、その「もの」は、悪霊によって引っ張られて**暗いトンネル**の中に連れて行かれ、消えて行ってしまいました。

突然、部屋は**氷のように冷たく寒くなり**、遺体だけがそのままベッドに残っていました。

私は夢を見たのでもなく、幻を見たのでもありません。しっかりと目がさめていました。

あれは、灰色の「**たましい**」なのでしょうか。

それだけではなく、私は悪霊までも見たのです。

私は、「ああ、**福音**を伝えなければならない、しっかりと**イエス様**にとどまらなければならない」と思いました。

Kが亡くなって数週間後、彼の村から一人の方が訪ねて来ました。

それで私は知ったのですが、彼が若かった頃、彼の住んでいた村に大リバイバルが起こり、毎晩毎晩、村の教会で伝道集會が開かれ、多くの人々が救われたそうです。

その時、Kも伝道集會に出席しましたが、どうしても**イエス・キリストを救い主として受け入れる決心**をすることができませんでした。

ある晩のこと、集會中でしたが、Kは立ち上がり、大声で、「**聖霊よ、出て行け！ もう私の所へ来ないでくれ**」と叫んで、外へ出て行きました。

その日以来、彼はまるで**別人**のようになり、**心が石のように硬く、冷たくなり**、神様の御声を二度と聞くことがなかったそうです。聖書に、「語っておられる方を拒まないように注意しなさい」と書いてありますね。

(ヘブル書12・25参照)

地獄は**本当にある恐ろしい所**です。悪霊も実際にいます。

地獄へ**引っ張られて行く人**を、私はこの目で見たのです。

だれも、**地獄が人生の最後の終着駅となることのないように**、主イエス・キリストをしっかりと信じていただきたいと、私は心から祈っている者です。

(イエス・キリストを拒んで暗いトンネルを通過して地獄へ行った男より)

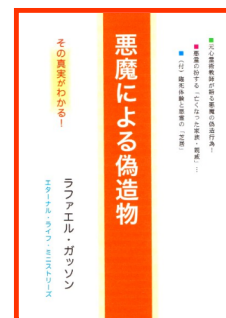
臨死体験で、「花畑」や「亡くなった家族や親戚」などを見たという事例があります。

そういう臨死体験をした結果、「自分は天国の『花畑』を見た」、「自分は死後に天国に行けるとわかった」、「死は怖くないとわかった」、「死の恐怖がなくなった...」などの感想を述べる体験者たちもいます。

けれども、それらは誤解と錯覚です。

本当は、非常に恐ろしい世界を体験しています。

臨死体験の真実と悪魔の偽造行為についての詳細は、『悪魔による偽造物』を参照ください。



4 《地獄行きの「暗いトンネル」》

臨死体験は、体験者が真のクリスチャンの場合と、それ以外の人の場合とで、全く異なります。

その後者の場合の証言で、体験者の霊が肉体から離れた後、「トンネル」を通過したという事例が多くあります。

真のクリスチャンたちの臨死体験では、そういう「トンネル」体験をすることなく、「天国」体験をします。（このような事例は、『天国の真実 第一集』『天国の真実 第二集』『天国についての神の啓示』等で多くの体験者が証言しています）

■真のクリスチャンたちの臨死体験

神の真の子どもである人が死ぬ時、その人の霊は体から離れ、神の御使い（天使）たちに護衛されて天国へ行きます。（『天国に行った人々・地獄に行った人々』参照）

聖書はこう述べています。

「その貧しい人が死ぬと、彼は御使いたちによってアブラハムのふところ（パラダイス）に連れて行かれた」（新約聖書 ルカによる福音書16・22）

神の人であった預言者エリヤが天に上げられた時も、天使たちに護衛されて上がって行ったことがわかります（旧約聖書 第二列王記2・11）。

ところが、罪人が悔い改めないまま死んだ場合は、彼らに天使が伴ったという記述はありません（ルカ16・22、23参照）。

■じょうごの形をした「地獄への入口」

1976年、メアリー・K・バクスター師は40日間にわたり、神によって現実の天国と地獄に案内されました。

彼女自身は「真のクリスチャン」でしたが、そうではない人々が死後に行き着くことになる地獄を案内され、その現実を世界の人々に証言して警告するようにと告げられました。

（詳細はメアリー・K・バクスター著『天国と地獄』『地獄についての神の啓示』）

彼女は地獄に通じる「トンネル」を体験し、こう述べています。

【証言1A】

「**じょうごの形**をしたものがいくつも**地球の中心**に向かってくるくる回転したり、また逆に回転したりしていて、それらが**地球の多くの場所から突き出て**散在していました。

これらのものは地球のはるか上を動いており、絶えず曲がりくねって動く醜悪な巨人のように見えました。これらのものは地球のあらゆる場所から突き出ていました。

...私は主イエス様に『これらのものは何ですか?』と尋ねました。

彼は言われました。

『これらは、**地獄への入り口**です。

私たちは、これらのうちの一つを**通って地獄の中**に入って行きます』

すぐに私たちは、その一つの**じょうごの中**へ入りました。

内側は「トンネル」のようで、くるくる回転したり、また逆に回転したりしていました。

深い暗やみが、私たちの上から下って来ました。...

これは、前述のメリー・アクセルソン師（スウェーデン）が目撃した「トンネル」と同様です。

【証言1B】

ある日、Kという名前の老人の体の具合が急変し、亡くなろうとした時のことです。

私は彼のベッドのそばに立っていました。

Kが亡くなる直前、彼は大声で、「**助けてくれ！ 助けてくれ！ 見ろ！**」と叫びながら、足元をさし、**恐怖に震える声**で言いました。

**「たくさんの悪霊が来て、私を地獄へ連れて行ってしまおうんだ！
助けてくれ！」**

彼は、そう叫びながら亡くなっていきました。

その時、私が恐れながらKの足元を見ると、そこに**真っ黒なトンネル**がありました。

そして、その中から**真っ黒な服を着て真っ黒な帽子をかぶった悪霊**が出て来ました。

老人の遺体からも、何か灰色の柔らかそうな「もの」（それは老人の体の形に見えました）が出て来ました。そして、その「もの」は、悪霊によって引っ張られて**暗いトンネル**の中に連れて行かれ、消えて行ってしまいました。

（イエス・キリストを拒んで**暗いトンネル**を**通って地獄へ行った男**より）

これらの証言は、「真のクリスチャン」以外の人々が臨死体験で報告していることと合致しています。

★日本人の臨死体験例

【事例1】「私は**暗いブラックホール**のような**トンネル**に吸い込まれ、**ぐんぐん急降下**し...」

【事例2】「**黒い穴**が...**すごく怖い**... **ブラックホール**みたい」

【事例3】「**暗闇**を...**暗いブラックホール**みたいなところにもものすごい力で引っ張られ...私は**怖くて必死**に抵抗したが...そのまま**ブラックホール**に引き込まれ...」

【事例4】「髪の毛を誰かにつかまれ、暗い、底のない井戸のような場所にぐいぐい引きずり込まれるような...井戸かトンネルかわからないが、下へ引っ張られる感じで、いくらもがいても暗い方へと引っ張られて行った」

★アメリカ人の臨死体験例

ケネス・E・ヘーゲン師がまだ『真のクリスチャン』ではなかった時の証言です。
(詳細は、『私は地獄に行った!』参照)

【証言2】

「私は肉体から飛び出し...下り始めました...下へ、下へ、穴の中へ下って行きました。
井戸か洞窟か洞穴の中に下って行くようでした。
...私は周囲を暗闇で取り囲まれていました。
...人間が見たことのない、どんな夜よりも暗い闇でした。
...そしてますます暑くなっていきました。
そしてついに、私のすぐ下で、光の先端が暗闇の壁にちらつくのが見えました。
...私とその穴の底に来ると、暗闇の壁に光の先端がちらついた原因となったものが見えました。
私の前方の地獄の門あるいは入口の向こう側のところに、巨大なオレンジ色の炎が見え、その先端が白くなっているのが見えました。...
『いったんその門を通して入ってしまったら戻れないだろう』とわかりました」

5 《トンネル内に潜む悪霊・恐怖の世界》

ケネス・E・ヘーゲン師は、こう述べています。

【証言2 続き】

「その穴の底で何かの生き物が私と出会ったことに私は気付いていました。
...私が自分が下って行くのを遅らせようとした時、その生き物が私の腕をつかみ、私を中に入れようとした」 (『私は地獄に行った!』参照)

もし、彼が腕をつかまれたままであったら、地獄に引きずりこまれ、地獄から二度と出られなくなったはず

です。
しかし、この臨死体験後、彼はイエス・キリストの福音を伝える神の奉仕者となりました。

メアリー・K・バクスター師は、地獄へ通じる「トンネル」を通過していた時、悪霊どもの存在に気付きました。

彼女はこう記しています。

【証言1 続き】

「...そして暗やみとともに、息ができないほどぞっとするにおいがしてきました。
このトンネルの側面には、壁に生き物たちが埋め込まれていました。
色は暗い灰色で、私たちが通る時、それらの生き物は動いて私たちに叫びました。
何も言われなくても、それらのものは悪しき者たちであることがわかりました。
それらのものは動くことはできましたが、壁にくっついたままでした。
ぞっとするにおいは、彼らから出ていました。
そして彼らは、この上なく恐ろしい金切り声で私たちに叫びました。」

私は、目に見えない**悪の力**が**トンネル**の内側を動いているのを感じました。...

『主よ、これらのものは何でしょうか?』と、私はイエス様の手にしっかりつかまりながら尋ねました。彼は言われました。

『これらは、**サタン**が命令を出す時、地上に吐き出される用意のできている**悪霊ども**です』

私たちが**トンネルの内側**を下っていくと、その悪霊どもは私たちを**あざ笑ったり**呼びかけたりしました」(『天国と地獄』『地獄についての神の啓示』参照)

地獄には**非常に大ぜいの悪霊ども**が存在します。そこに通じている「**トンネル**」を臨死体験者たちが通る時、そういう「**生き物**」(悪霊)が目撃されています。

★日本人の臨死体験例

【事例5】「**不気味な暗いトンネル**又は**大きならせん階段**にも見えるものが現れ...私はこの**暗いトンネル**に立っていることに**恐怖**を感じ...

このトンネル...ありとあらゆる所から**灰色の手**が数多く出てきて**私の手や足をつかんだり髪を引っ張ったり**、たくさんの人々の**うめき声**や**苦しんでいる顔**が浮き出てきたり...**邪魔**をしてきました。

これは地獄の世界なののでしょうか。私は**あまりの恐怖**で叫びながら必死でした」

【事例6】「ものすごい速度で**落下**し始め、**茶色い何とも言えない生物**達が迫ってきました。

そして、無数の茶色い生物に**引っ張られました**。その際に**地獄**だと感じました」

【事例7】「**暗く**、**怪物のような奇妙な生き物**のいる**気持ちの悪いトンネル**のようなものを通り過ぎ...

臨死体験者たちは**実際に**地獄の中に入ったわけではありません。

なぜなら、いったん地獄に入ってしまうと、出ることは永遠にできないからです。

体験者たちは、ケネス・E・ヘーゲン師のことばで言えば、「**井戸か洞窟か洞穴**」(**トンネル**)の終点である「**穴の底**」、「**地獄の門あるいは入口**」のところにまで行ったと考えられます。

■地獄の存在する場所

罪のあるまま死んだ人々について、聖書は、彼らがすぐに**地獄**に行ったことを述べています。(詳細は、『**地獄についての聖書の教え**』参照)

「**地**がその口を開き、彼らと彼らのものをすべて飲み込み、彼らが生きたまま、**よみ(地獄)**に下る...

(民数記16・30)

「**地**はその口を開け...彼らは生きたまま、**よみ(地獄)**に下った。...地は彼らの上を覆った」(民数記16・32、33)

彼らが**下って行った先**に、**よみ(地獄)**が存在しているのです。

「死者の霊は、水とそこに住んでいるものたちの**下**から震える。

よみ(地獄)は彼(神)の前に裸であり、**滅びの地**に覆いはない」(ヨブ26・5、6)

「彼らはみな、死に渡される。**地の下の所**へ、人の子らの中、**穴に下る者たち**のもとへ」(エゼキエル31・14。エゼキエル26・20、32・18も参照)

聖書は、**地獄**が**地の下の場所**、すなわち、**地球の中心部**にあることを教えています。(マタイ12・40、エペソ4・9、10等)

聖書が述べているこれらのことは、メアリー・K・バクスター師、ケネス・E・ヘーゲン師ほか地獄を見た多くの人々の証言とも完全に一致しています。

6 《偽造された「故人・家族」》

■偽造された「亡くなった知人・親戚・動物...」

真のクリスチャン以外の人々の臨死体験で、「トンネル」体験の後、「亡くなった知人・親戚・動物」などとの出会いが報告される事例が多くあります。

★日本人の臨死体験例

【事例8】「ブラックホールのような漆黒の大きな穴が目前に見えた。...急に怖くなり、寒気がした。...向こうから亡くなった近所のおばあさんが横切ったり、穴のギリギリのところに立っては消え、おいで、おいで、と...」

【事例9】「気づくと川のほとりに立っていた。川の反対岸には沢山の人がいて、こちらに何か言っている。...親戚のよう。その一番前に、亡くなっている祖父がいて...」

【事例10】「その花畑から、以前飼っていた犬が出てきて...」

【事例11】「昔の友人、親戚一同が一斉に出てきました。三途の川も出てきた。同時に神がたくさん降りてきた。...神が多数出現し、西郷隆盛などの日本の英雄も登場した」

【事例12】「一人で真っ暗闇の中にいた。とにかく出口を探して歩き続けていると、前のほうから幼なじみ
が手招きをしているのがわかった。

私は嬉しくなって、『〇〇ちゃん！』と声をかけたが、彼女は...何もしゃべらずニコニコ笑って立っただけだった」

■人間に変身する悪霊

こういうさまざまな登場人物は、本物のその人なののでしょうか？

聖書はこう述べています。

「サタン自身が光の御使いに変装する...」（第二コリント11・14）

ラファエル・ガッソン氏は、かつて心霊術の教師でしたが、その後、クリスチャンとなりました。

彼の著書『悪魔による偽造物』からも、次のことが明らかです。（「第九章 物質化...偽造の人間と物体」参照）

悪霊は人間に変身できるのです。

そういう「登場人物...人間」は、実は、**悪霊どもによる「偽造人間」**です。

悪霊どもは人間の生活を非常に詳細に知っているのです。

ラファエル・ガッソン氏が証言している通り、「人間一人一人の生活をきわめて詳しく調査することができるほど十分な数の悪霊どもが存在する」のです。（第四章）

悪霊どもはその人物の**姿に変身**できるだけでなく、その人物の**性格や背景、内密のことを詳しく知っており**（彼らは『ファミリアー・スピリット』と呼ばれています）、まんまと人をだますことができます。

ラファエル・ガッソン氏はこう証言しています。

【証言3 その1】

「私は、一つの部屋が、物質化されて**人間の姿をとった者ども**で満ちていた時のことを覚えています。彼らはみな、同時に話しました」（第九章）

彼は、「**人間の姿をした霊（悪霊）と握手**した」ことも、そういう霊から「**水を浴びせられた**」ことも述べています。（第九章）

ただし、悪霊どもの偽装は完璧ではありません。たとえば、このような事例もあります。

★日本人の臨死体験例

【事例13】「水の中に立っていた。…水は濁っていて中が見えない。何かいて、履いてる**ズボンの裾を引っ張ってくる**。…何年も前に**亡くなった祖父**だった。…水の中で仰向けで片腕だけ伸ばして、私のズボンの裾を引っ張っていた。

薄っぺらくて、作り物みたいに見えたが、間違いなく**祖父**だった。…あの水の中にいた祖父は**地獄**に落ちたのか？ 引っ張っていたのは私を連れて行きたかったのか？…

でも、**あの声**は、祖父ではなかった」

■動物・昆虫・奇妙な塊にも変身する悪霊

かつて「サタンの使い」であったバガラス・カンコ師も、悪霊どもがさまざまな姿に変身できることを証言しています。（同書の《序》参照）

彼は、悪霊どもが、**男性、女性、子どもなどの人間の姿**として現れることもできるし、**動物、昆虫、蛇、ハエ、トカゲ、タコ、イカ、カニ、ウミヘビ、魚**、あるいは、奇妙な塊（かたまり）などにも**変身**できること、さらに、悪霊の大きさも、顕微鏡で見えるくらいの**細菌（ばい菌・病原菌）**として現れるものもいれば、超高層ビルほどの大きさのものもいることを証言しています。

サタンは自分に仕える人間にも、**変身する力**を与えています。

バガラス・カンコ師がサタンの使いであった時、サタンは彼に、「**蛇、ワニ、チョウ、トカゲ、カニ**」の五つの生き物に**変わる力**を与えていました。

同じく元「サタンの使い」であったエマヌエル・エニ師も、かつて、彼が「**女性や獣や鳥や猫**」などに**変身**できるようにされていたことを告白しています。（詳細は→エマヌエル・エニ師著『祈りの奥義』参照）

7 《 偽造された「自分とそっくりの人間」 》

悪魔は、ある人物と「**そっくりの人間**」に変身して、その人の前に現れることもできます。

『**悪魔による偽造物**』（ラファエル・ガッソン著）の「第四章 透視と透聴」に記されている通り、「人間一人一人の生活をきわめて詳しく調査することができるほど**十分な数の悪霊どもが存在**」し、彼らはその人物の**姿に変身**できるだけでなく、その人物の**性格や背景、内密のことを詳しく知っており**、人々をだましています。

真のクリスチャン以外の人々が臨死体験で「自分とそっくりの人間」が現れたという報告もあります。

★日本人の臨死体験例

【事例14】

「トンネルを抜けると...そこには私が幼少期の時に亡くなった祖父がいた。
私があたりを見渡すと、もう一人の自分。
もう一人の自分はニコッと私に向かって微笑んだ...」

【事例15】

「同じ姿をした、もうひとりの自分が現れ、別世界へと誘われた」

【事例16】

「...気付いた瞬間、もう一人の僕が...何十発と自分の顔を本気で殴っていた、と言うよりか、殴られていた。

...

『すみませんでした』と反省し続ける僕に対して、容赦なく殴るもう一人の自分。親が『どうしたの?』と聞くぐらい顔が腫れ上がり...」

ラファエル・ガッソン氏もこの体験をしました（同書「第一章 サタンからキリストへ」参照）。

【証言3 その2】

「ある日の晩、私が落胆していた時、私を捕らえようと待ち構えていた悪魔が機会を見出したのです。
私はロンドンの道を歩いていました。私の思いは非常にかき乱されており、何をすればよいかも、どこに行けばよいかも、わかりませんでした。

その時、突然、私は私の前に、私とそっくりの人間を本当に見たのです！
...私がこの私自身の不思議な幻を見つめていると、その幻が話しかけて、こう言いました。

『私について来なさい』

私が片足を前に出すと、私の全身が持ち上げられるのを感じました。

私の頭の中は完全に空っぽになりました」

この「自分とそっくりの人間」が案内した先は、「心霊術者たちの教会」でした。（第一章）
もちろん、この「そっくり人間」も、悪霊の変身でした。

真のクリスチャン以外の人々が臨死体験で、「光の存在者」を見たという報告があります。

しかし、悪魔は「神の天使」に見せかけて現れることさえ可能なのです。

聖書がこう記している通りです。

「サタン自身が光の御使いに変装する...」（第二コリント11・14）

8 《 本当の天国と偽物の「天国」（花畑） 》

真のクリスチャン以外の人々が臨死体験で、「花畑」などを見たという報告があります。

しかし、詳しく調べてすぐにわかるのは、それが本物の天国のパラダイスの光景とは異なる種類のものであることです。

■本物の天国

オスシツェ・ムシ師は、神によって案内された天国のパラダイスを、こう証言しています。（『天国の真実 第一集』参照）

【証言4】

「...あたりの風景は、神の命で満ちていました。

その壮麗な光を通して、パラダイスの多くの被造物たちが見えました。

...パラダイスは命と光に満ちており、生きていました。

どの一つのものにも奇形のものがないのが見えました。

彼らは老いることはなく、永遠に若いままです。

...天国には、土壌がある場所もあれば、草地のある場所もあり、透き通った金の舗道と、広大で果てしない木々の森と、とても美しいさまざまな花との場所もあります。

...水晶のように透明な命の川は、首都である新しいエルサレムにある神の御座から来ています。

それから、それが枝分かれして命の多くの川々となり、天国のさまざまな場所に流れています。

巨大な山々や丘もあります。海や湖もあります。

何千種類もの動物王国もあり、私たちが家畜と呼ぶものも、野生の動物も、あらゆる種類の鳥もいます。

さらに、純白の服を着た大ぜいの天国の聖徒たちも、さまざまなタイプの大ぜいの天使たちもいます。

パラダイスは非常に広大で、果てがないように見えます。

...それは最高のものであり、栄光と感激と喜びが私に押し寄せてきました。

私はその都の巨大な金色の城壁にも気付きました。

...私は家や邸宅のようなものも見ました。それらは非常に大きく、金色でした。

首都および神の中央の御座の位置する東のほうから、いつも強い光が差しています。...

ところが、真のクリスチャン以外の人々が体験する「花畑」は、異種の世界です。

★日本人の臨死体験例

【事例17】

「地面を見ると、花畑は消え、あたりは真っ暗でした」

【事例18】

「一面色とりどりの花々、虹、山、滝、色とりどりの鳥、チョウチョもヒラヒラ飛んでいた。

太陽のように白くまぶしい光の中に、神様が現れた。...神様に促されて、いろんな世界を見に行った。

暗く怪物のような奇妙な生き物がいる世界...もあった」

【事例19】

「花畑にはチョウチョウや鳥やいろいろなものが飛んでいた。

遠くて顔はわからないが、三人の人がこっちへ来いとでも言うように手を振っていた」

【事例20】

「花畑。空はなく、とても低い感じ。...三途の川...。

気付いたら、足はなく、よく描かれる幽霊のような下半身をした人が二人。私の方を見て手招きをしていた」

【事例21】

「周りに白い花がいっぱいあることがろうじてわかるくらい真っ暗なところにいた。

...あんなに真っ暗で白い花がいっぱいあるような意味のわからない場所だった」

【事例22】

「木や山があり、いろいろな花も咲いているが、見たこともない花もあった。

その花から好い香りが漂っている花もあり、嫌な香りがする花もあった。

...私はすごい恐怖感を覚え、隠れるところを私は一生懸命、必死になって探した。

...暗い道を歩くと、怖い恐怖心が湧き上がるような感じで、私は不安と恐怖に襲われた」

いったい、どういうことなのでしょう？

9 《 臨死体験で演じられている「芝居」 》

■悪霊どもによる「芝居」

元心霊術の教師であったラファエル・ガッソン氏は、この「救出の働き」、すなわち、「悪霊による悪霊追い出し」について、こう述べています。（『悪魔による偽造物』第七章「救出の働き」『役割分担をしている悪霊ども』の項を参照）

【証言3 その3】

「...彼らは、信じ込ませるゲームを演じているのです。

彼らはまさに邪悪な霊どもですが、『良い』霊のふりをしている悪霊もいれば、自分を『邪悪』であると公言する悪霊どももいるのです。...

その行為は、うまく計画されています。

...こういう『だましごと』が演じられるのを可能にしている『人間のだまされやすい性質』を、どちらの霊も、いっしょにあざ笑っているのです」

真のクリスチャン以外の人々の臨死体験の多くも、悪霊どもによって演じられている「芝居」です。

悪霊には、「そっくりの変身」、「そっくりの声」、「そっくりの模造」、「内密（私事）の知識」、「悪魔による超自然的奇跡や病気のいやし」など、人間にはできない能力が多くあります。

彼らはそういう超自然的な能力を巧妙に使い、人間をだまして、『信じ込ませる芝居を打っている』のです！

■『芝居』の出演者...サタンと悪霊ども

登場する「亡くなった知人・親戚・動物...」の正体は、「変身した悪霊ども」です。

本物の「亡くなった知人・親戚...」が地獄（あるいは天国）から抜け出してきた『芝居』に登場しているわけではありません。

同書の「第九章 物質化...偽造の人間と物体」で明らかのように、悪霊どもは人間にも、動物にも変身できます。

しかも、彼らは人々の性格や背景も熟知しており、巧妙に「知人」や「親戚」に「なりすます」ことができます。

■『芝居...天国劇』が演じられている場所

それは、**地獄の入口の近く**にある、そういう「**臨死体験者**」専用の『**特設会場**』と考えられます。

そもそも、**本物の天国**は「トンネル」を通って行き着く場所ではありません。

「**トンネル**」を通って行く先の場所は、すでに見てきた通り、**地獄**です。

悪霊どもは、**地獄の入口近くの『特設会場』**に、そういう「**臨死体験者**」専用の「**花畑**」という**舞台を設置**して出迎えていると考えられます。

■微妙な（あるいは、大きな）ちがい

地獄の中に偽造されている「花畑」は、本物の天国のパラダイスとは全く比べものになりません。（前ページ参照）

本物の天国を知っている人々なら、その**微妙な（あるいは、大きな）ちがい**は明らかです。

本物の天国は、

「**命と光に満ちて**」おり、

「**奇形のものがない**」所であり、

「**栄光と感激と喜びが押し寄せて**」来るのが感じられ、

神の愛がいたるところに**浸透**している所です。

他方、**真のクリスチャン以外**の人々が**臨死体験**で見た「**花畑**」は、

「**暗く怪物のような奇妙な生き物**」が存在し、

「**足はなく、よく描かれる幽霊のような下半身をした**」者が存在し、

「**嫌な香りがする花**」も存在し、

「**周りに白い花がいっぱいあることがかろうじてわかるくらい真っ暗なところ**」、

「**すごい恐怖感を覚え**」、

「**暗い道**」があり、「**不安と恐怖に襲われ**」る場所です。

そこは、**本物の天国**ではなく、**悪魔と悪霊どもが支配している場所**です！

■臨死体験者たちの抱く錯覚

ところが、本当の天国を知らない**臨死体験者**たちの多くは、このような『**特設会場**』に案内されると、本物の天国の『**花畑**』を見たのだと**錯覚**してしまうのです。

そういう**臨死体験者**たちの抱く**錯覚**は、たとえば、こうです。

★日本人の臨死体験例

【事例23】 「**臨死体験**をすると、**死は怖くない**ことを知った」

【事例24】 「あれ以来、**死の恐怖**がなくなり...」

彼らが受け取るメッセージや感想は、同書でわかる通り、**心霊術の悪霊ども**が伝えようとしているものと似ています。

すなわち、「**悪魔は存在しない**」、「**地獄は存在しない**」、「**靈魂の生まれ変わり**」、「**死後の『裁き』の否定**」、「**死後は何もかもハッピー**」、「**罪に対する『永遠の刑罰』は存在しない**」などです。

10 《本物の地獄の恐怖》

(臨死体験と、悪霊の「芝居」より抜粋)

■臨死体験で恐怖を体験する人々

臨死体験はワンパターンではありません。

「トンネル」や「花畑」を体験しない人々もいます。(覚えていない可能性もあります)

また、『芝居』を見ずに、悪霊や地獄の本物の恐怖を体験する人々もいます。

それは、悪霊どもが本性を現している時です。彼らの姿は、もはや「変身(変装)」した人間の姿ではなく、このうえなくグロテスクで恐ろしいものです。

本物の地獄に案内され、本物の悪霊どもを見ることを許されたビル・ウィーズ師は、悪霊どもの姿をこう描写して証言しています。(HP「地獄での23分...ビル・ウィーズの体験」参照)

【証言5】

「一匹の悪霊は体中にうろこがあり、巨大な歯のある大きなあごがあり、爪は突き出ている、目は、くぼんでいました。彼らは実に巨大でした。

そして、これとは少しも似ていない別の悪霊もいましたが、それは体中に、かみそりのような鋭いひれがあり、一本の長い腕と、釣り合いのとれていない二本の足がありました。

どの悪霊も奇形で、ゆがんでおり、釣り合いがとれてなく、対称的ではなく、左右対称のものは何もなく、一方の腕は長くてもう一方は短く、とても奇妙に見える生き物で、恐ろしく、恐ろしく見える者たちでした」(『地獄での23分』HP参照)

臨死体験で、その恐怖の一部を体験した人々もいます。

★日本人の臨死体験例

【事例25】

「気づいたら真っ暗な世界にいました。...周りには顔が見えない人が沢山いた。...

私はその人達に腕を引きちぎられ、足を引きちぎられたりし、その世界でとても苦しんだ。

...今度は階段みたいな所に縛られ、同じ様なことをされ...そんなことを何回もされて、いっそのことこんな苦しい事が続くならもう生き返りたくない、死にたいと思った」

この「腕や足を引きちぎったり」したのは、悪霊以外の何ものでもありません。

そして、この「真っ暗な世界」も、天国ではなく、地獄の入口に近いどこかの場所と思われます。

■臨死体験で拷問を受けた人

同様の臨死経験をしたハワード・ストームという人がいます。(HP「地獄に行きかけた無神論者」参照)

【証言6】

「ますます暗くなるにつれ、徐々に彼らは残酷さを増していきました。

その生き物たちは私をからかい始めました。...

初めのうちは、それらの生き物は一ダースくらいいるようでしたが、その後は、四十匹か五十匹くらいいると思うようになりました。

さらにその後では、何百匹か、それ以上いるようでした。...

その生き物どもは私を押ししたり突いたりして反応しました。

最初は、私はうまくやり返して、彼らの顔を打って彼らを蹴ることができました。

けれども、私は彼らに少しも苦痛をもたらすことができませんでした。

彼らはあざ笑っているばかりでした。

それから彼らは指の爪や歯で私をひっかき始めました。

私は本物の体の痛みを経験しました。

これは長い間続き、私は戦って、彼らをかかわそうとしました。

それが困難だったのは、私が大ぜいの者たちの真ん中において、私の周囲に彼らの手や歯があったからです。

私が悲鳴を上げて、もがけばもがくほど、彼らはそれをますます気に入っていました。

その騒がしさは、ものすごいものでした。

残酷な笑い**と絶え間ない拷問**があったからです。

それから彼らは、別のさまざまな仕方でさらに私を侮辱したり、暴力を振るったりしました。

それは、あまりにも恐ろしくて話すことができません。

その会話も、想像できないくらいにひどいものでした。

ついに私にはもうこれ以上戦う力も能力もなくなり、地面に倒れました…」

この人は、この時、無神論者の大学教授でした。彼はまさに地獄の中に行こうとしており、すでに大ぜいの悪霊どもから拷問を受けていたのです。その続きは、こうです。

【証言 6 続き】

「このうえなく深い**絶望**のその瞬間、私の子どもころの歌声が頭に浮かんで来ました。

私が日曜学校に出かけて行った時のものでした。

『イエス様は私を愛しておられます…

イエス様は私を愛しておられます、私はそれを知っています』

…私の知性も力も心も、私の存在のすべてをもって、私は**暗闇の中**に向かって叫びました。『どうかイエス様、私を救ってください!』

私は**本気**でした。私はそれを疑うことはなく、私の全存在をもって本気でそう言いました…」

幸いにも、彼は**本気**でイエス・キリストを受け入れました。そして、**地獄**に行く必要はなくなりました。

この臨死体験後、彼はイエス・キリストの福音を伝える牧師となりました。

(『天国と地獄の現実』 HP「[地獄に行きかけた無神論者…ハワード・ストームの体験](#)」参照)

11 《 悪霊どもによる本物の拷問 》

(臨死体験と、悪霊の「芝居」より抜粋)

確かに恐ろしい「**臨死体験**」も存在しますが、**本物の地獄の体験**は、それとは比べものになりません。

ビル・ウィーズ師は、悪霊どもによる**本物の拷問**を体験し、こう証言しています。

(HP「[地獄での23分…ビル・ウィーズの体験](#)」参照)

【証言 5 続き】

「一匹の悪霊がすぐに私をつかんで、私を**拾い上げ**、コップを投げるように私を**壁に投げつけ**ました。

すぐに彼は、コップを拾うように私を**拾い上げ**ました。…

彼が私を壁に投げつけると、私の体のすべての骨が折れました。

しかも私は痛みを感じたのです！

すぐに私はその床の上で横たわり、あわれみを求めて泣き叫び始めました。

しかし、これらの生き物は少しもあわれみを持っていません。

完全に全くあわれみを持っていないのです。

一匹の悪霊が私を拾い上げると、もう一匹の悪霊が、かみそりのように鋭い爪で私の肉をずたずたに切り離しました。

彼はすぐにそれを引き裂きました。...

その悪霊はこの体に対して全く何も気にしませんでした。その悪霊は私に対してとても激しい憎しみを持っていました。...

私の肉は、ずたずたになって、そこにぶら下がっていました。

そして、そこには血が全くなく、肉だけがぶら下がっていました。

なぜなら、命は血の中にあり、地獄には命は全く存在しないからです。

また、地獄には水も全く存在しません。

私は完全に彼らの思うままでした。

地獄で悪霊どもはあなたの命を支配するのです。

【証言 5 続き】 [悪霊の臭い・地獄の臭い]

これらの悪霊の臭いも、地獄の臭いも、実にひどいものでした。私はそれをみなさんに描写することさえできません。

肉が焼かれる臭い、硫黄の臭いがありました。

これらの悪霊どもの臭いは、下水、腐った肉、腐った卵、酸っぱくなった牛乳などに似ていました。

それを取って1000倍にし、あなたの鼻に近づけてみてください。そして、それを吸い込んでみてください。それは非常に有毒で、人を殺してしまうくらいでした。

もしみなさんがその肉体でそこにいとすれば、きっと死んでしまうはずですよ。

私は、『この臭いをかいでいながら、なぜ私は生きているのだろう、こんなにひどい臭いなのに』と思いました。

しかし、それでも人は死なないのです、人はそれに耐え忍ばなければならないのです。

あわれみは天国に存在します。

あわれみは神から来ます。

しかし悪魔はどんな種類のあわれみも知りません。...

そこは、人が耐え忍ばなければならない、残酷で、悲惨で、恐ろしい場所です。

そういうものを全部耐え忍ばなければならないのです。

悪霊どもが知っているのは、神への憎しみ、あなたへの憎しみと拷問だけです。

そして彼らはあなたの命を支配し、あなたはそれについて何もすることができないのです。...」（HP「地獄での23分... ビル・ウィーズの体験」参照）

■もはや「芝居」を見なくなる時

悪魔と悪霊どもが人々の臨死体験で『芝居』を打っているのは、人間がイエス・キリストの福音を受け入れて天国に行くことがないようにするため、すなわち、地獄に送り込むためです。

人はだれでも、実際に自分の死を体験する時が、いずれ来ます。

その時、真のクリスチャン以外の人々が『芝居』を見ることは、もはやなくなります。

悪魔が「芝居を打つ」必要はなくなるからです。

12 《死に物狂いの動きをしていた人々》

(臨死体験と、悪霊の「芝居」より抜粋)

臨死体験者たちが悪霊からどんな暴行を受け、どんな恐怖を体験したとしても、本物の地獄の永遠の苦しみには、はるかに及びません。

聖書はこう言っています。

「もしだれかがその命の書に書かれている者として見出されなかったなら、その人は火の池に投げ込まれた」(黙示録20・15)

本物の「火の池」の苦しみを体験することを許されたマイケル・イーガー師は、次のように証言しています。(『地獄の恐怖・天国の壮麗』参照)

【証言7】

「...地獄の大海原の表面から二千フィート(600メートル)ほど上方のところで、私の体に打ち当たっていた痛みは、圧倒するばかりの、耐えがたい、信じがたい、そして、すべてを焼き尽くしてしまうほどのものでした。

私の両方の肺は燃えていました。私の両目は焼かれており、飛び出しそうに感じました。

私の服はすでに焼かれていて、溶けて私の肉にくっついていました。大やけどを越えていました。...私は自分が向かって進んでいる方向を見下ろしました。

火の湖の表面に、小さな黒い物体のようなものが激しく上下に動いているのが見えました。

...

ところが、それらの物体の両端に手足が付いていました。そして、それらの手足は、前後に、また前後にと波のように揺れており、死に物狂いの動きをしていました。

突然、私は自分が何を見ているかに気付き、私の奥底から、深い、苦痛のうめきを吐き出しました。

これらの動いている黒い物体は、人間たちにほかならなかったのです！

人々です！

彼らは、あらゆる国と文化と民族と言語の、大ぜいの人類でした。

そして彼らは悲鳴を上げ、うめき、金切り声を上げており、その渦巻く溶岩の中で、ひっくり返され、投げ飛ばされ、真逆さまにされ、さらわれていました。...

それは永遠に呪われたたましいたちでした。

それは、希望も、逃れることも、助けも、苦痛からの救助も、全くないたましいたちです。

もしかすると、これらの人々は、みなさんや私が知ったことのある人たちかもしれません。

キリストを愛することなく死んだ父たちや母たち、兄弟たちや姉妹たち、おばたち、おじたち、近所の人々、友人たちです。...

神は義なる神であられるゆえ、罪を裁かなければなりません。

これらの人々がこの真理を発見した時は、もう手遅れでした。

というのも、彼らが死んで目覚めたら、硫黄と火の、恐ろしい、煮えたぎる湖の中だったからです。

彼らには、逃げ道は全くなく、苦痛からの助けも全くなく、将来への望みも全くありません。

これらの人々には、終わることのない拷問の苦しみと、寂しさと苦痛以外、待ち望むべきものは何もありません。

彼らの体は、バーベキューの炉で焼かれすぎたチキンのように真っ黒に焼かれていました。決して終わることのない地獄の、その消えることのない炎が、彼らのたましいを真っ黒にしていました。その場所にいた人々は、生きて動いている木炭のかけらのように見えました...」

13 《 火の池の中の体験！ 》

(臨死体験と、悪霊の「芝居」より抜粋)

■火の池の中の体験！

マイケル・イーガー師は、自ら、この地獄の火の池の中の体験をしました。

(『地獄の恐怖・天国の壮麗』参照)

【証言7 続き】

「...私はその溶岩の中に突入しました！
それは、燃えている泥か流砂のようでした。
すぐに、それは恐ろしい凶暴さで私を中に吸い込みました。
それは私を包み込み、私を下へ引っ張り、終わることのない苦しみと痛みの中へ私を飲み込みました。
それは私に覆い被さり、私の口も鼻も耳も目も、圧倒するばかりの強烈な燃えるような痛みで満たしました。
炎を上げて燃える地獄の硫黄が私の口の中に入りました。
それは私ののどを下って行き、私の腹の中に入り、私の両方の肺に満ちました。
私は完全な恐怖のバプテスマで浸されました。
私の両目は焼き尽くされて飛び出しそうに感じました。...
私の全身に火が付いていて、キャンプファイアーの赤い石炭の中にマシュマロが落ちたように燃えていました...」

(『地獄の恐怖・天国の壮麗』参照)

14 《 聖なる都・キリストと 大ぜいの聖徒たちの幻 》

ソロモン・B・ショー (『天国に行った人々・地獄に行った人々』より抜粋)

■とても美しい天使たち

私(ソロモン・B・ショー)の知人であるケアリー・カーメンが死の淵に立っていた時、彼女は上を見つめ、こう叫びました。

「美しいわ！ 美しいわ！ 美しいわ！」

だれかが尋ねました。

「何がそんなに美しいんだい？」

「ああ、**彼らはとても美しいわ**」

「何が見えるんだい？」

「**天使たちよ**。彼らはとても美しいわ」

「彼らはどんなふうに見えるんだい？」

「ああ、私には言えないわ、彼らはとても美しいのよ」

■どんな歌よりも美しい歌・聖なる都

「彼らには羽根があるの？」

「そうよ。聞いて！ 聞いて！」

彼らは、私が今まで聞いた**どんな歌よりも美しい歌**を歌ってるわ」

「キリストが見えるの？」

「ノー。でも、**あの聖なる都**が見えるわ。

葦で測ると、『**長さ**と**幅**と**高さ**は**同じ**』（黙示録21・16）、**あの都**よ。そのてっぺんは、空にまで届いているわ。どんなにすばらしいか私には言えないくらい、**とても美しいわ**」……

それから彼女は、彼女の夫が寂しい思いをすることになることについて話し、彼が妻に先立たれる思いに耐えられるようにと祈りました。彼女は彼女の両親のためにも祈り、**その美しい都**の中で、破られることのない**きずな**で彼らがいっしょになれるようにと求めました。

■イエス・キリストと大ぜいの聖徒たち

彼女は目を閉じ、そして一瞬、安らぎ、それから輝きのある目で上を見上げ、こう言いました。

「私は**キリスト**が見えるわ。そして、ああ、彼はとても美しいわ」

彼女の夫がふたたび尋ねました。「彼はどんなふうに見えるんだい？」

「私には言えないわ。でも、**彼は、はるかに、はるかに美しいわ**」

ふたたび彼女はこう言いました。「あの**聖なる都**が見えるわ」

それから、一瞬、見つめて、こう言いました。「とても大ぜいよ！」

「何が見えるんだい、何がとても大ぜいいるんだい？」

「人々よ」

「どのくらい大ぜいいるんだい？」

「とても大ぜいよ。私には**数えられないくらい大ぜいよ**」

「だれか知っている人は？」

「いるわ、大ぜいいるわ」

「誰？」

「おじのジョージと、大ぜいよ。

彼らは私を呼んでいるわ。彼らは私を手招きしているわ」……

■天国への旅立ちの時

彼女は目を上げて、こう言いました。

「ああ、私をこのベッドから離して運んでください」

彼女の夫はこう言いました。

「彼女はベッドから降ろしてほしいんだ」

しかし、彼の父親はこう言いました。

「彼女は**天使たち**と話しているんだ」

彼女にそのことを尋ねると、彼女は、「そうよ」と答えました。それから彼女は医師に、これまで親切にしてくれたことへの感謝のことばを述べ、**天国でお会いしましょう**と言いました。

彼女は目を閉じると、すばやく沈んで行きそうに見えました。

...彼女は、彼女自身のために祈り、また彼女の友人たちのためにも祈りました。

...彼女は、まるで、とても美しい数々の光景があるかのように、**上を見つめ、笑みを浮かべました。**

(『天国に行った人々・地獄に行った人々』より抜粋)

15 《 2015年の天国訪問 》

オスシツェ・ムシ師

オスシツェ・ムシ師は2010年以降、天国・地獄に幾度も案内され、多くの啓示を受けています。詳細は、『天国の真実 第1集』『天国の真実 第2集』『クリスチャンへの警告 携挙の真実』を参照ください。

■天国への旅立ち

...私は、何か目を見晴らせるようなことは全く何も**予期**していませんでした。

私は、主が彼の御臨在と御力で私を満たしてくださると思っていただけでした。

ところが、主はそれ以外のことを思っておられました。

祈りの後、私は眠りに就きました。真夜中に私は目を覚まし、それから、...

聖霊の御力が突然私の上に臨まれ、私を満たし、私を力づけました。

私は、私の**霊が体から離れる**のを感じました。

私は**上方へ**連れ去られました。

以前、私が**天国**を訪れるべく高速で連れ去られたことは何度もありましたが、この時ほどの信じられないような速さで旅をしたことは一度もありませんでした。

私は、私の**霊の体**が、**風に運ばれる一枚の羽根**のようにとても軽いのを感じました。

これは、**霊が体から離れる**体験でした。

聖霊が私の**霊を天国**へと運ばれる時、『フーーーーーシュ』という大きな音が聞こえました。

私は、私の**霊の体**の顔などに、**風の涼しい冷気**を感じました。

私は上向きで飛んでいました。私はとても軽く、少し透明に見えました。

私には依然として感覚がありました。事実、それはいっそう高められていました。

それから私はいくつもの**雲**を見ました。

それらの雲は横に分かれたり、別の方向に離れたりしました。

以前は雲を通り抜けたことがありましたが、今回はそうではありませんでした。 ...

■パラダイスの中

しばらくして、私たちは**神の領域**に入りました。

そこには、**穏やかな風と光の輝き**とがありました。

それから、**美しい天上の星々**が見えました。それらは**水晶のように透き通って**いました。

こう告げる声が聞こえました。

「ここは**第三の天**です」（新約聖書 第二コリント12・1～4 参照）

私たちはそこに近づいて行き、その中に入りました。

私たちが初めに着いたのは、この圧倒するばかりの、見事な**パラダイスの中**でした。

この時も、私が以前そこを訪れた時と、よく似ていました。

私は、以前に自分がいた場所を思い出しました。

私は、**金色のように見える色の植物**や、**真緑色の植物**を見ました。**黄色や赤色の植物**もです。

木々は緑色で直立しており、色の混ざったものもありました。

背丈の高い**草**、**美しい花々**もありました。

この場所は**神の光**で満ちていて、**信じられないような光景**でした。...

■命の川

水晶のような**命の川**がパラダイスを流れているのが見えました。

私はその大気の中で飛んでいましたが、それを見た時、もっと低い所を飛び始めました。

その後、私の両足は、その川の上にあります。

水の動きが見えましたが、私は全く濡れませんでした。

天国で人々は水の上を歩くことも、泳いで川を渡ることもできます。

この川は**神の御座**から、**都**や**パラダイス**の中へ流れています。

■天国で見た黒人男性

私は、ハンサムな若い黒人を見ました。（天国では、だれもが若くて、健康で、たくましく見えます）

彼は**白い長服**を着ていました。彼はパラダイスを歩いて通っていました。

私は彼と話すこともしませんでした。私が彼を見た時、聖霊は私に、彼がだれであるかを告げられました。

聖霊が私に啓示されたことの一つですが、その黒人は、かつては熱心なラスタファリアン（エチオピアの旧皇帝ハイレ・セラシエ一世を黒人の救世主とし、アフリカ回帰を唱える）でした。

彼はその後の人生で、悔い改めて**イエス・キリスト**に命を献げ、彼のために生きました。

そして彼は死に、**天国**に案内されました。

彼は**とても幸せそう**でした。彼はその川べりを歩いて、パラダイスの南へと向かっていました。

私は、「ワウ」と声に出しました。

主が私にこのことを見せてくださったのは、ある目的のためでした。

■天国で会った聖徒たち

天国では、物事が**超自然的に**わかります（啓示による知識）。

私の以前の訪問や幻で、私は天国にいる人々を初めて見ても、彼らがだれであるかを正確に知りました。私は地上で彼らと一度も会ったことがなかったのに、です。

私が見た聖徒たちは、アブラハム、ヨセフ、私たちの主なるイエス様の母マリア、使徒パウロ、エリヤ、エノク、愛する弟子ヨハネ、ペテロ、ダニエル、サムエル、族長たち、子羊の使徒たち、聖書の有名な人たちや偉大な聖徒たちなどです。

聖霊はその超自然的な知識を私の霊に分与してくださり、この人が〇〇ですと言われるのです。

■子どもたちと女性のインストラクター

私は金の道の上を飛んでいました。

それから、地上のあらゆる人種から成る幼い子どもたちのグループが見えました。

彼らは小さな白い長服を身に着けていました。

彼らはとても幸せそうで、微笑んでいました。彼らの中で、笑い声が聞こえました。

彼らには一人のインストラクターがいました。女性の存在者でした。

子どもたちのインストラクターたちは、母親のような聖徒たちと女性の天使たちで構成されています。

私はこう言いました。

「ワウ、幼い子どもたちだ」

私が啓示によって知っているのは、彼らの中には、地上での中絶手術のために死んだ子どもたちもいれば、それ以外のさまざまな原因で死んだ子どもたちもいることです。

彼らは天国に来ると、成長していき、神についての知識を教わります。...

それから私はイエス・キリストとお会いしました。彼は歩いておられました。

彼の髪は金色で、彼の両肩にまで流れており、美しい髪でした。

彼の長服は白くて、優雅に彼の上に掛かっていました。

それは最上の長服で、とても白く、あらゆる意味できちんとして完璧でした。

その方こそ、私のたましいの愛して慕う方であられました。

私は彼といっしょにしばらく歩きました。

■「彼らに告げなさい、...」 イエス・キリストからのメッセージ

主はこう言われました。

「行って、人に告げなさい、もし彼が本当に悔い改め、彼の罪深い生き方から立ち返り、私のもとに来るなら、私は彼を赦し、彼を受け入れ、以前の彼の生活がどんなに罪深いものであっても彼を義とします。

人に告げなさい、私は彼に新しい命を与えたいと望んでいることを。

私を自分の生活の中心とした人々、私の前にまっすぐに歩いて、行うすべてのことで私を喜ばせている人々に告げなさい、彼らの地上の旅路が終わる時、私は彼らを連れてくるために私の聖なる天使たちを送り、そうして彼らは私がいるこの場所で私といっしょに生きることができるようになる、と。

彼らに告げなさい、義なる生活をおくり良い行いをするに疲れてはならない、と。

彼らに告げなさい、この曲がった世代のただ中で光として生きるべきことを。

彼らに告げなさい、彼らは自分の報いを失うことは決してない、と。

彼らの報いは天国において私とともにあります。..... (略) 」

私は、紙上に表現することのできない、信じられないような存在者たちや物を見ました。

私はそれらをどう描写すればよいか、わかりません。

主は私にいくつかのことについて語られました。

私が立って、東のほうに目を向けると、果てしなく広大な被造物、野原、ジャングル、あらゆる種類の動物のいる森などが見えました。

■天国の邸宅・目を見張るような美しい光景

それから突然、私は風のように別の局面に案内されました。そこで私は、都の一部を見ました。大きな、広々とした数々の邸宅が見えました。配列は完璧で、それらの邸宅には宝石がちりばめられていました。水晶でできているような邸宅もありました。それらは完全に透き通っているように見えました。輝きのあるガラスの邸宅もありました。長方形の邸宅もありました。それら邸宅のてっぺん、あるいは屋根は、びっくりするようなものでした。長い列に連結されている邸宅もありました。さまざまな大きさと形とデザインの家や邸宅や建物がありました。それらの邸宅は荘厳なものでした。私は、その裏庭を歩きました。それらの邸宅の周囲には壁は全くありませんでした。その代わりに、花や美しい草木の庭園がありました。その花々は、だれも手入れしなくても自ずと育っているように見えました。それらのものを妨害するものは何もないようでした。それらは完璧でした。私が見たほとんどの邸宅は、未入居でした。また、大ぜいの人が同居できるようにデザインされた邸宅もありました。私はさまざまな邸宅を見ました。透き通った緑色の宝石のように見える一軒の邸宅がありました。ソフトな緑色の光でした。それは、目を見張るような美しい光景でした。いたるところに、美しい道、光、さまざまな色が存在しました。... (『クリスチャンへの警告 携挙の真実』より抜粋)

16 《 2015年の地獄訪問 》

オスシツェ・ムシ師

■私は地獄に案内された！

今朝の午前3時、主は私を地獄に案内されました。私の霊の目は開かれており、私は滅びたたましいたちの領域に案内されました。私は、地獄がさまざまな部門やレベルに配列されているのを見ました。私は最初に、赤くて熱いマグマ、液体の火を見ました。そこで私は、熱い火が渦巻き状に動いているのを見ました。まるで、その底に、その火をあおいでいる何かが存在するかのようでした。それが回転すればするほど、ますます熱くなりました。人々はその恐怖で悲鳴を上げていました。私は、それが非常に熱いとわかり、それに近づきたくありませんでした。私は別の場所を見ました。燃えている大きな炎が見え、闇の中で、おびただしい数の人々が悲鳴を上げているのが聞こえました。そこには火と暗闇が存在しました。最初、私が聞いたのは、叫び声や、泣き声や、うめき声でした。ところが、それらの声がどこから聞こえてくるのか、私には見えず、わかりませんでした。しかし、どういわけか、私はのぞき込んで見ることができたのです。

地獄のある一つの場所で、**私がいっしょに学校に通ったことのある人**を私は見ました。
その人は、私の名前を呼んで**叫んで**いました。
あたりに他の人々もいましたが、だれなのかは見分けが付きませんでした。
彼らも、それぞれ自分なりの**拷問**に捕らえられており、空中に**手を投げ出し、体は焼かれていました...**

■だまされている人々

主はこう言われました。

「**死んでから**地獄にいる自分を見出すことになる人々が大ぜいいます。...

この人々は、本当はそうでないのに、自分は私と正しい関係にあると考えるよう、**だまされています**。

行って、彼らに**警告**しなさい。

私は彼らが**心を尽くして私につき従い、私を彼らの生活の中心とすることを望んでいます**。

彼らは、**私を**彼らの人生の**主**としなければなりません。

私が何らかのことについて彼らに警告する時、彼らは従わなければなりません。

私は、私の御霊により、彼らの心の内で、彼らに語ります。

また、彼らを矯正するために私の聖徒たちを送ることもあります。

この世への愛と、多くのたましいを誘惑するためにサタンが形作った**娯楽産業**のために、多くのたましいがこの場所に行き着いています。

行って、彼らに告げなさい、私をも世をも愛することは、だれ一人できないことを。

彼らは**選ばなければなりません**」...

■地獄にいた、あらゆる種類の人々！

この場所には、あらゆる種類の**悪霊ども**と**拷問**が存在しました。

私は、悪霊どもが人々を**あざけったり**、彼らを**突き刺したり**、**目をえぐり出したり**しているのを見ました。

人々は**死ぬほど叫んで**いました。

あらゆる種類の恐ろしい拷問がありました。

...悪霊どもは彼らの上に**跳び乗り**、彼らを**突き刺し**、彼らの**肉を引き裂き**ました。

私は泣いており、私の顔を隠そうとしながら、こう言いました。

「私はこれを見ることはできません！ 私はこれを見ることはできません！」

頭を切断された人々もいました。

地獄には、多くの場所に、さまざまな仕方で死んだ**あらゆる種類のたましい**が存在しました。

彼らは、さまざまな**罪**の中で死に、そして、多くの仕方で**拷問**を受けていました。

老人も若者もいました。**病気**で死んだ人々も、**健康**なままで死んだ人々もいました。

白人もいれば、**黒人**もいました。買い物をしていた時に死んだ人々、**事故**で死んだ人々、テロリストに襲われて死んだ人々、神秘的な死に方をした人々、誘拐されて儀式でいけにえにされて死んだ人々、病院のベッドで死んだ人々などもいました。彼らは**不信者たち**でした。...

そういう人々はみな**拷問**で苦しみを受けており、あの**火の炎**や、**悪霊ども**や、地獄のさまざまな**拷問**を逃れることはできませんでした。

地獄は**非常に広大であり、人々で満ちています**。

自分の心の中に偶像を持っていた人々のいる場所も存在します。彼らは、神以上に、神以外のものを愛して崇拜し、それらのものが彼ら自身の**偽の神々**となっていたのです。（出エジプト記34・14）

偶像礼拝する人々が天の御国を相続することはありません。

性的な罪、淫行、姦淫、売春、レイプ、同性愛、情欲などに関わっていた人々のための場所も存在します... 酒飲みたちのための場所、殺人者、白人たち、インディアンたち、黒人たち、よく知られた人々・有名な人々、金持ち・貧乏な人々のための場所も存在します。

■新しく生まれ変わって正しい生活をする

主は私にこう言われました。

「あなたにこのことを語っておきましょう。

『あまりにも**金持ち**であるために、あまりにも**有名**であるために、地獄に行くことは**あり得ない**』という人は、**一人もいません**。

新しく生まれ変わって正しい生活をしているのでなければ、その人が地上でどのような**社会的ステータス**を持ってしようと、**最後は地獄に行き着く**こととなります」

私は『**マグマ**』のようなものの上方を漂っていました。

「ああ、これは恐ろしい！」と私は泣き叫んでいました。

私は主に、「私はあれを見たくありません」と言っていました。

たましいたちは、**炎の中**で、また**悪霊ども**により、**拷問**で苦しめられていました。

私は自分の両手で私の目を覆おうとしました。

主はこう言われました。

「あなたはこれを見て、この場所のことを人類に**警告**する必要があります」

どうか、地獄に行かないでください。

きょう、あなたの罪を悔い改めて、聖い生活をしてください。 ...

(『**クリスチャンへの警告 携拳の真実**』より抜粋)

人間が死ぬ時、その人が**真のクリスチャン**の場合と、それ**以外**の人の場合とで、そのようすも行き先も**全く異なります**。

神の真の子どもであるクリスチャンが死ぬ時、その人の霊は体から離れ、神の御使い(**天使**)たちに護衛されて**天国**へ行きます。

けれども、**真のクリスチャン以外**の人々が死んだ場合は、全く異なります。彼らに**悪霊ども**が現れ、**地獄**へと彼らのたましいを引きずり下ろして行きます。

前者の人々は、現在も、そしてこれからも永遠に、天国で**このうえなく幸せな至福の中**にいます。

後者の人々は、地獄で**このうえなく苦しくてつらい拷問**を受けており、やがて**燃えさかる火の池の中**で**永遠を過ごす**こととなります。

地獄における永遠の滅びではなく、**天国**における永遠の命と幸いを選択しようではないでしょうか。

17 《 今が救いの日！ 》

聖書はこう警告しています。

「私たちは...あなたがたが神の恵みをむだに受けないうよう勧告します。
なぜなら、彼（神）はこう言われるからです。
『私は、受け入れられる時に、あなたに聞き、救いの日に、あなたを助けた』
見よ、今が喜んで受け入れられる時、見よ、今が救いの日なのです」
(第二コリント6・1、2)

(イエス・キリストによる救いについては、『地獄に行かず、天国に行く方法』をお読みください)

■神はあなたを深く愛しておられます！

神はあなたを深く愛しておられます！

人間は死んでから無に帰するのではなく、天国か地獄で永遠に生き続けます。

罪があるままでは、100パーセント確実に地獄に行き、
永遠に苦しみ続けることになります！

もちろん、神はあなたが天国に入れるようになることを望んでおられます。

イエス・キリストは、あなたにこう語っておられます！

「私はあなたがたが地獄に行くことを望んではいません。
私は、私自身の喜びのため、またいつまでも続く交わりのために、あなたがたを造りました。
あなたがたは私が創造したものであり、私はあなたがたを愛しています。
私が近くにいる間に私を呼び求めなさい。
そうすれば、私は聞いてあなたがたに答えましょう。
私はあなたがたを赦して祝福したいと願っています」

《イエス・キリストから世界へのメッセージ》より

★HPから、こちらを順にお読み下さい。

《 1.神様はどのようなお方か？ 》 《 2.罪とは何か？ 》 《 3.どうすれば天国に入れてもらえるのか？ 》

★HPから、こちらもお読みください。

■天国での感激の再会！ ■地獄で焼かれていた兄弟と友人たち！

■スキューバ・ダイバーの体験 ■サタンにだまされて地獄に来た16歳の少年

■クリスチャンたちをあざ笑い、福音をばかにした男の結末 ■私は地獄の中を歩いた！

■神を拒んだ老婦人 ■ガーナの少年が目撃した最後の審判！ ■地獄に行きかけた無神論者！

■地獄での23分...ビル・ウィーズの体験 ■本物の「地獄」体験と、サタンによる偽物の「光」体験

★ この表示付であればコピー・無料配布・インターネット上への転載が自由にできます。

Copyright c. エターナル・ライフ・ミニストリーズ <http://www.eternal-lm.com>

《天国と地獄の情報》 <http://www.tengokujigoku.info>